雪の日

樋口一葉

青空文庫

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶の羽そで軽く、枯木も春の六花の眺めを、世にある人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて称ゆらん浦山しさよ、あはれ忘れがたき昔しを思へば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔の八千度その甲斐もなけれど、勿躰なや父祖累代墳墓の地を捨てゝ、養育の恩ふかき伯母君にも背き、我が名の珠に恥かしき今日、親は瑕なかれとこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経よとは思しも置かじを、そもや谷川の水おちて流がれて、清からぬ身に成り終りし、其あやまちは幼気の、迷ひは我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。

我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身は其一つぶもの成りしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁ぎし伯母の是れも良人を失なひたるが、立帰りて我をば生したて給ひにき、さりながら三歳といふより手しほに懸け給へば、我れを見ること真実の子の如く、蝶花の愛親といふ共これには過ぎまじく、七歳よりぞ手習ひ学問の師を撰らみて、糸竹の芸は御身づから心を尽くし給ひき。扨もたつ年に関守なく、腰揚とれて細眉つくり、幅びろの帯うれしと締めしも、今にして思へば其頃の愚かさ、都乙女の利発には比らぶべくも非らず、姿ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり幼なくて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明し暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何方の誰れか見とめけん、吹く風つたへて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名ぐさ恋

すてふ風説なりけり。

世は誤(あやまり)の世なるかも、無き名とり川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通学せし学校の師なり、東京の人なりとて容貌(みめ)うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我が家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室(はなれ)を仮(かり)ずみなりけり、幼なきより教へを受くれば、習慣(ならはし)うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴なひて、おもしろき物がたりの中に様々教へを含くめつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同胞(はらから)なき身の我れも嬉しく、学校にての肩身も広かりしが、今はた思へば実(げ)に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行水(ゆくみづ)の色なくとも、結(ゆ)ふや嶋田髷これも小児(こレども)ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には学びたるを、忘れ忘られて睦みけん愚かさ。

見る目は人の咎(とが)にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜(あたら)白玉の瑕(きず)に成りて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母そだてにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行(ふしだら)さ、両親あれば彼(あ)の様(やう)にも成らじ物と、云ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方(そち)が母、臨終(いまは)の枕に我れを拝がみて。姉様お願(ねがひ)は珠が事をと。幽(かす)かに言ひし一言あはれ千万無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲斐(そのかひ)もなく、世の嗤笑(ものわらひ)に為しも終らば、第一は亡き妹に対し我が薄井の家名に対し、伯母が身は抑(そもそ)も何とすべき。と御声ひくゝ四壁(あたり)を憚りて、口数すくなき伯母君が思(おぼ)し合(あ)はすることありてか、しみじみと諭(さと)し

給ひき、我れ初めは一向夢の様に迷ひて何ごとゝも思ひ分かざりしが、漸々伯母君の詞するどく。よく聞けよお珠、桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も又慕はしかるべし、されども此処に法ありて、我が薄井の家には昔しより他郷の人と縁を組まず、況てや如何に学問は長じ給ふとも、桂木様は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の譽とも言ひがたく嫁にも遣りがたし、よし恋にても然かぞかし、無き名なりせば猶さらのこと、今よりは構へて往来もし給ふな、稽古もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追従もしたれ、益も無き他人を珍重には非らず、年来美事に育だて上げて、人にも褒められ我れも誇りし物を、口惜しき濡れ衣きせられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以来は断然と行ひを改ため、其方が名をも雪ぎ我が心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思はゞ、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門すぎる共寄り給ふな。と畳みかけて仰する時我が腸は断ゆる斗に成りて、何の涙ぞ睚に堪へがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。

口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村挙りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを、汚れたりとや思す恨らめしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覧じ知る筈を、誰が讒言に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かきさばきても身の潔白の顕はしたやと哭きしが、其心の底何者の潜みけん、駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり。

小簾のすきかげ隔てといへば、一重ばかりも疾ましきを、此処十町の間に人目の関きびしく成れば、頃は木がらしの風に付けても、散りかふ紅葉のさま浦山しく、行くは何処までと遠く詠むれば、見ゆる森かげ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かげに浮かんで、夕暮ひゞく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へど流石に戒しめ重ければ、足は其方に向けも得せず、せめては師の君訪ひ来ませと待てど、立つ名は此処にのみならで、憚りあればにや音信もなく、と絶えし中に千秋を重ねて、万代いわふ新玉の、歳たちかへつて七日の日来りき、伯母君は隣村の親族がり年始の礼にと趣き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗らく成るまゝに、吹く風絶へたれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心ぼそく不図ながむる空に白き物ちら〳〵、扨こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬燵のもとに思ひやれば、いとど降る雪用捨なく綿をなげて、時の間に隠くれけり庭も籬も、我が肘かけ窓ほそく開らけば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森も空と同一の色に成りぬ、あゝ師の君はと是れや抑々まよひなりけり。

禍ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善とも知らず悪しとも知らず、唯懐かしの念に迫まられて身は前後無差別に、免がれ出しなり薄井の家を。

是れや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返へらず、心いそぎて庭口を出しに、嬢様この雪ふりに何処へとて、お傘をも持たずにかと驚ろかせしは、作男の平助とて老実に愚かなる男なり

し、伯母様のお迎ひにと偽れば、否や今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕が参らん、先待給へと止めらるゝ憎くさ、真実は此雪に宜くこそと賞められたく、是非に我が身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、お子達は扨らも無きもの、さらば傘を持給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、転ろばぬ様に行き給へと言ひけり、由縁あれば武蔵野の原こひしきならひ、此一言さへ思ひ出らるゝを、無情かりしも我が為、厳しかりしも我が為、末宜かれとて尽くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君のことなり。

斯くまでに師は恋しかりしかど、夢さら此人を良人と呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりしを、行方なしや迷ひ、窓の呉竹ふる雪に心下折れて我れも人も、罪は誠の罪に成りぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨らみんも果敢なし、都は花の見る目うるはしきに、深山木の我れ立ち並らぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとも総べて誤なりき、故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げき歎げきて、其歳の秋かなしき数に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保たんのみ、思へば誠と式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔しの恋しき物を

（完）

青空文庫情報

底本：「新日本古典文学大系　明治編　24　樋口一葉集」岩波書店
　　2001（平成13）年10月15日第1刷発行
初出：「文学界　第三号」
　　1893（明治26）年3月31日
※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2007年8月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の日

樋口一葉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/